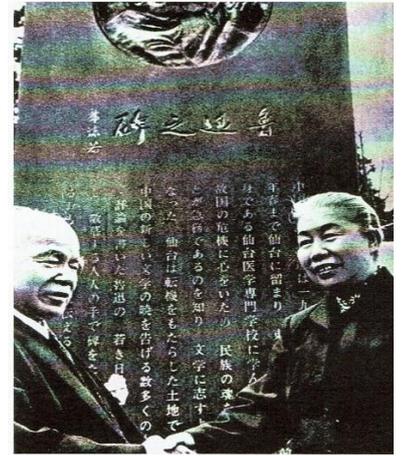


TNC
通信

2021
4月号

「魯迅之碑」除幕 60 周年 許広平女士について

本年 4 月は「魯迅之碑」(郭沫若・筆 仙台市博物館横)が魯迅夫人・許広平女士を迎えて除幕(1961 年 4 月 5 日)して 60 周年に当たります。碑自体は「魯迅記念碑建設委員会」(委員長・熊谷岱蔵元東北大学総長)を中心として各方面から寄付を集めて前年の 12 月 4 日に建立されています。



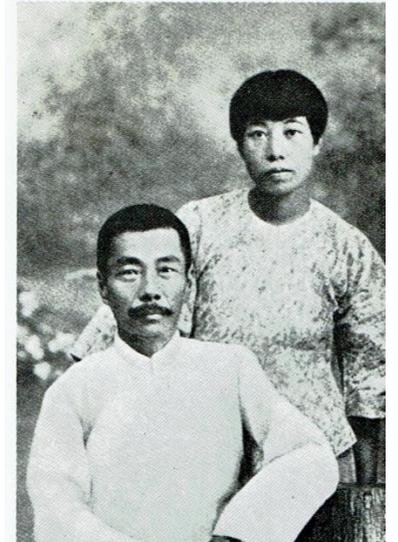
【丑(う)年 アラカルト】

「牛を搏(う)つのは蛇は以って虱を破るべからず」一大きい牛を苦しめるアブでも皮膚に食い込んでいるシラミを殺すことはできない、の意。外敵は滅ぼしやすいが内部の小敵には勝ちにくい。『史記』

当時、女士は中国婦女連合会代表団長(写真⑤右側、左は熊谷委員長)として、初来仙したもので、女士はあいさつで「各界各層の友人の方々により、心を込めて造られた、日本中国人民の友誼を示す碑が見事に完成し、除幕式に参列できたことを心から嬉しく思い、熊谷先生ほか建設委員会と友人の皆様にあつい敬意を表します」(略)と祝辞を述べています。※2021 年 1 月「日本と中国」宮城版による。

また帰国後にも『人民日報』(1961 年 6 月 20 日)に「仙臺漫筆」と題して、寄稿しています。寄稿文は「TNC 通信」2010 年 5~8 月号で紹介していますのでご参考にして下さい。

《本年は魯迅生誕 140 周年に当たる事もあり、随時、魯迅関係の内容を取り上げていきたいと考えています。写真⑥は魯迅と許広平》



『中国少数民族民話』「牡(チワン)族 オオトリとエビ」①

広い、広い、際限なく広い海の真ん中に、小さな島がありました。島はうっそうとした密林にすっぽり覆われていて、中央には「東の海」と呼ばれる湖が横たわっています。島は無人島で、一羽のオオトリと、たくさんの小鳥たちが仲良く暮らしていました。

ある日のことです。オオトリは湖に飛んでいき、湖に水の半分を一気に飲んでしまいました。小鳥たちは、この様子をまわりの樹々の枝に止まって見ていましたが、皆一様にびっくりし、オオトリの豪快さ、勇壮な姿を称賛し、畏敬の念を抱くようになりました。それからというものオオトリはすっかり高慢になりました。そして、いつも他の小鳥たちにひけらかして「この世の中には、オレのように大きな生きものは他にいないぞ！」と言っては、島の内外を飛び回り威張りちらしていました。

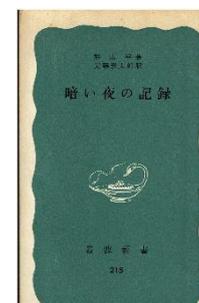
そんなある日、オオトリは少し遠出をし、大海原までやってきました。しかしあまりにも遠くまで飛んできたので、すっかり疲れてしまいました。ふと前方を見ると、何か海面に柱のようなものが、二本突き出ています。そこでオオトリはあそこに止まって、羽を休めようと考え、ふわりと舞いおりました。すると下の方から、大きな怒鳴り声が聞こえてきました。「お前は何者だ！ オレさまの髭(ひげ)に止まって休むとは、不届きなヤツ！」

その声の大きさにびっくりしたオオトリは、さっと飛び立ち、慌てて下を見ました。するとそれはなんと、エビの触覚でした。オオトリはオオエビの触覚に止まって、羽を休めようとしていたのです。せわしなく飛び立ったオオトリは空中で羽ばたきながら、天を仰いで言いました。(つづく)

※牡族は広西チワン族自治区を中心に居住、中国最大の少数民族。
※訳者の辻元氏は宮城県日中友好協会の会員。退職後に大連外語大に学ぶ。
残念ながら他界されましたが、生前に掲載の許可を得ています。

「暗い夜の記録」(許広平著、安藤彦太郎訳、岩波新書)

魯迅未亡人の著者は日本占領下の上海で憲兵隊に逮捕・電気拷問等を受けた。その発端から留置所での生活そして日本軍、国民党の事、子・海嬰の事、魯迅の失われた書、所有物等を記している。「私のこのような書物が要らなくなりますように、印刷しなくともいい日がきますように、これが著者の心からの願いなのです」と日本語版に寄せている。また巻末には同時代に魯迅一家を支えた内山完造の「当時の思い出」も収録されており、解説も含め貴重な歴史証言の一書でもある。古本、図書館でどうぞ。(M)



「当時の思い出」も収録されており、解説も含め貴重な歴史証言の一書でもある。古本、図書館でどうぞ。(M)